



名前	派遣先	派遣期間
張 子平	浙江工商大学 日本文化研究所	2014年11月20日 ～ 2014年12月10日
小泉 優莉菜	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター	2014年12月22日 ～ 2015年 1 月11日
鍋田 尚子	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心	2014年10月20日 ～ 2014年11月9日
松下 里織	サンパウロ大学 日本文化研究所	2014年 9 月24日 ～ 2014年10月13日
程 亮	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2014年10月17日 ～ 2014年11月3日
胡 穎	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学研究所	2014年12月23日 ～ 2015年 1 月7日
新垣 夢乃	漢陽大学校 東アジア文化研究所	2015年 1 月13日 ～ 2015年 1 月26日

## 浙江工商大学東亜文化研究院訪問 研究後記

張 子 平

(歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)



2014 年 11 月 15 日からの 25 日間、私は神奈川大学非文字資料研究センターの若手研究者として、中国の浙江工商大学東亜研究院を訪問し、浙江省図書館に収められている、文禄の役に明国の援軍を率い、朝鮮を救援した経略宋応昌の関連史料を調査・収集しながら、杭州市内の宋応昌に関する史跡を探した。

まず、11 月 15 日から 17 日にかけて、上海復旦大学文史研究院の主催する第二回「周縁から見る中国」国際シンポジウム「朝鮮通信使文献を中心に」に参加し、日・中・韓三国の 15 人の研究者の発表を聞いた。尚且つ、関周一・黄修志両先生と意見交換を行った。

11 月 20 日に、杭州に在る浙江工商大学東亜研究院に到着し、正式に今回の訪問研究を始めた。此度の訪問先の浙江工商大学東亜研究院は中国に在る有数の日本歴史文化研究の重鎮である。王勇氏や陳小法氏を代表とする研究者達は、東亜研究院で長い間中国の日本歴史文化研究と日中文化交流の事業を進めている。今回、副院長陳小法先生の協力を頂き、自分の調査活動が順調に展開した。

11 月 21 日以降、私は毎日浙江省図書館に行つて、当館の地方文献室に収蔵されている、杭州に関わる地方志類の史料を調べ、宋応昌に関する記録を探っていった。

結果、歴代の浙江省志の中で宋応昌についての一番早い記事が、1735 年に完成された雍正『浙江通志』に存在することを確認した。その他に、清末の代表的な杭州蔵書家と地方文人丁丙の撰する杭州の街市沿革史『武林坊巷志』の中で宋応昌の旧居についての記事を探り出した。

その間の 11 月 26 日に、陳先生と共に、杭州「北高峰」の山麓に在る金魚井村で宋応昌の墓所の調査を行っていた。残念なのは、ここ数十年来の開発のため、現地の明清時代の墓所が殆ど消え、既に地元村民達の墓園となっていたことである。調査はこの一日に留まらず、11 月 27 日には、自ら伝宋応昌故居の所在地の「孩児巷」（がいじこう、現在杭州市下城区孩児巷）を調査し、彼の功績を謳て建てられた「経略華夷」牌坊（ばいぼう）の遺跡を調べた。結果、26 日の調査と同じように、1950





代以来重なる改造によって、もう跡形なく消えてしまった。また、12月1日に、杭州拱墅区に在る明代古橋拱宸橋並びに近所の運河博物館と刀・剣・剪博物館を見学した。

今回の訪問研究においては、多く有益な史料を入手し

ただけではなく、陳小法先生や聶友軍先生など浙江工商大学東亜研究院の研究者達との交流もうまくいき、生活の面においても、薛曉梅先生にいろいろお世話していただいた。ここに、東亜文化研究院の皆様のご厚意に心よりお礼を申し上げたい。

## フランス国立高等研究院での 絵画研究

小泉 優莉菜  
(歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)



現在私は長崎県下における「かくれキリシタン信仰」の調査・研究を進めている。今回、フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センターへの派遣を希望した理由は2つある。1つは当研究センターが図像学や宗教学に関する様々な研究実績を確立していることであり、もう1つは当研究センターのヨセフ・キブルツ先生の指導を仰ぎたいという希望があったからである。

長崎県生月島のかくれキリシタン信仰においては「御前様」と呼ばれる女人の描かれた掛け軸が祀られている。しかし、彼らに聞き取りをおこなっても、これらが「何の姿を描いたものなのか」ははっきりとは分からない、という。江戸の弾圧期を聖職者のいない中で伝承を続けていくうちに「自分たちが何を祀っているのか」が分からなくなってしまったのである。そして今回、図像学の手法を専門的に学ぶことによって明らかにしていきたいと考えた絵画は生月島山田地区のものである。山田地区の御前様も誰が描かれているのかについて信者たちは分

からないという。

今後、かくれキリシタン信仰に関する研究を続けていく中で、このように「何を描いたのかが分からない。」という事例に数多く出会うであろうことが予想される。そのため、キリスト教の宗教芸術に関する図像学の知識を深める必要があると考え、今回派遣を希望した。

日本におけるキリスト教カトリックの歴史と、フランス・パリの関係は深い。元々、日本へのキリスト教の布教をおこなったのは、スペインのイエズス会士である、フランシスコ・デ・ザビエルらの一派が最初であるとされている。しかしその後の弾圧や禁教政策により、その当時のキリシタン文化はほぼ失われてしまった。今ではそれらを、かくれキリシタン信者たちのキリシタン文化の中に、片鱗をうかがうことだけしかできない。

しかし、その後、明治以降に日本国内でパリ・ミッション教会が精力的に布教活動をする中で、かくれキリシタン信仰にも少なからず影響を与えていた、ということが今回の調査で分かった。1873年に日本でのキリスト教禁教令が解かれた後、真っ先に再布教に乗り出した会派こそが、パリ・ミッション教会である。そして、こ



図1 使徒ヨハネの立像  
(中世美術館にて撮影)



図2 エッフェル塔



図3 サクレ・クール寺院内部



図4 マドレーヌ寺院内部の  
パイプオルガン